

116 古くて新しい和紙（2022年6月16日）

日本の伝統工芸の一つに、手漉き和紙があります。2014年に「和紙：日本の手漉和紙技術」が、ユネスコ世界無形文化遺産に登録されました。奈良の正倉院には、8世紀初めに作られた日本最古の紙が残されています。和紙は、耐久性があるだけでなく、和紙の成分が美術品の劣化を防ぐ効果があることから、貴重な美術品の修復に使われています。実用性の高さに加えて、温かみのある白色と風合いも和紙の魅力です。

この和紙に魅了されたのが、ブノワ・デュドニオンさんとステファニー・アールさんです。お二人は、島根県で和紙職人から和紙作りを学んだ後、南仏モンペリエから1時間ほどのサラスクでフランス産の和紙作りをしています。フランス産の和紙（日本の紙）とはどういう意味でしょうか？それは、フランスにある材料を使い、日本の伝統的な道具と技法によって作られる紙です。ただし、フランスと日本では環境が異なりますので、フランスの気候に合わせて作り方を工夫する必要があります。

紙の原料となるのは、楮（コウゾ）です。地元で生えているコウゾを刈り、外皮をはいで内側の白皮を煮て柔らかくし、水の中で汚れを取り、細かく碎きます。これに粘り気のある液体を合わせて、簀桁（すけた）と呼ばれる道具を使って紙を漉きます。デュドニオンさんの紙漉きの様子は次のリンクからご覧ください



<http://www.atelierpapetier.com/>。全て手作業で行うことは手間がかかる上に、冬は冷たい水の中で作業をしなければならない重労働です。

お二人に和紙の魅力を伺うと、環境に優しくて丈夫なことだとおっしゃいます。伝統的な技法で作られる手漉き和紙は、天然の材料しか使いません。コウゾは根を残して刈り取りますので、二酸化炭素を吸収して成長し、翌年にはまた収

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

穫することができるという自然界の循環サイクルが成立しています。紙は傷みやすいと思われがちですが、千年以上前に作られた和紙が現存することが証明しており、手漉き和紙は耐久性があります。一般的に機械で作られる紙よりも、繊維が長いからです。耐熱性もありますので、しわになったらアイロンをかけてしわを伸ばすことができます。



お二人は、照明や仕切りなどのインテリア、植物やレースを挟んだ紙、洋服や写真用紙といった様々な作品を手掛けています。手漉き和紙に写真を印刷すると、繊維の奥までインクが染みこむため、年月を経ても色が褪せないと言います。お二人は、和紙には多くの可能性があるとおっしゃいます。近い将来、内装に和紙だけを使った

家が作られるかもしれません。大きなサイズの手漉き和紙を作ることができるようになれば、和紙の映画スクリーンができる可能性もあります。手漉き和紙は、循環型社会を目指す現代に合致しています。日本で千年以上も作り続けられてきた手漉き和紙は、新しい素材として発展を遂げようとしています。

